第　40　号

県中教研
英語部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　吉田　和央
題　　字　金山　泰仁　先生

言語活動の質の向上を目指して

指導主事　佐藤　宏樹

学習指導要領には、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力はこれまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっていることを背景に、現行の学習指導要領に改訂された旨が記載されています。今、世界人口が80億を超え、私たちは直接的であれ、間接的であれ、何らかの形で世界中の人々と外国語によるコミュニケーションを行う機会に出会います。

このような状況の中で、生徒が主体的に「外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力」を身に付けていくためには、日頃の授業の改善、特に言語活動の質の向上を目指すことが欠かせません。今年度、研修等で多くの授業を拝見しました。授業では、コミュニケーションを図る目的や場面、状況等が明確に設定され、生徒が主体的に取り組む姿が見られました。またICTの活用や、ALTが効果的に参画する場面が見られ、言語活動の質の向上につながる様々な工夫がありました。中でも印象的だった音読活動を紹介します。感情を込めた音読になるよう、グループ学習で生徒同士がアドバイスし合う場面。グループ内では、「enjoyed、wonderful、delicious、great等の感情を表す部分を大事にするといいのかな」と意見が交わされ、実際に自分たちで試しながら読んでいました。また、学習者用デジタル教科書を使って個に応じた音読練習をする時間を取っていました。授業終末の発表では、グループで何度も確認したことを生かし、積極的に自信をもって発表をしていました。

中学校では、小学校や高等学校との接続に留意した指導が望まれており、そのために引き続き言語活動の質の向上を目指していくことが必要です。

（東部教育事務所）

どういう生徒を育てたいのか

部長　吉田　和央

県中教研11月調査を終えて寄せられた意見・要望では、英作文の採点に関するものが多くみられました。例えば、以下のようなものです。

・「程度により減点する」を明確にしてほしい。
・「コミュニケーションに支障をきたさない（きたす）程度」が分かりにくい。
・多く書けばミスをする確率が上がり、最低限の語数で書くと高得点になることがあり、残念。

学力調査なので正確に採点しなければという気持ちが強いのだと思います。以前の私も同様でした。

今年度の授業力向上アドバイザー、文教大学の阿野幸一先生が、新川地区と砺波地区の研究大会において、英作文の採点についてお話しくださいました。講演の中に、以下の演習がありました。

Q. 過去形を学びました。３点満点で採点してください。（知識・技能）

I <u>went</u> to Shibuya. I <u>buy</u> a new shirt. After that, I <u>met</u> one of my friends and we <u>eat</u> sushi. We <u>talked</u> a lot. I <u>have</u> a good time.

buy, eat, haveが過去形でないため、どちらの会場でも、１つにつき１点減点して０点という意見が多く出ました。次に、全く同じ文章を思考・判断・表現で採点するとどうなるかと質問されました。両会場とも、１点か２点という意見がほとんどでした。阿野先生は、「規則動詞の変化（talked）を理解しており、不規則動詞もwentとmetが書けている。つながりのある内容になっている。これで減点されるとなれば、生徒は積極的に表現しようとせず最低限の語数しか書かなくなる。どういう生徒を育てたいのか」と問題提起されました。

「問題や条件を正確に把握しないと採点できない」、「そもそも知識・技能で採点する問題ではない」という声が聞こえてきそうですが、私は採点云々より、もっと大事なヒントをいただいたような気がしました。私たちは一体どういう生徒を育てたいのか、そのためにはどのような指導をしていくべきなのか、一人一人が今一度考える必要があると思います。

（富・山田中）

第68回研究大会報告

新　川　地　区　　（下・入善中）

１　研究授業

池原沙織教諭とALTナディア・ズベィール先生が、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で体験したことを英語でスピーチをして伝え合うことを学習課題に設定し、２学年で研究授業を行った。スモールトークでは「職業体験」について会話し、本時の課題であるスピーチ活動までの流れが関連付けられていた。また、中間評価では、数人に発表させ、それぞれのスピーチのよい点を生徒たちに考えさせたことで、自分のスピーチを改善しようとする自己調整の機会となり、生徒たちは主体的に学習に取り組んでいた。

２　研究協議（指導助言）

ワールドカフェ形式の討議を行い、即興的やり取りと生徒の英語使用量等について多くの意見を共有した。佐藤宏樹指導主事（東部教育事務所）からは、複数の異なるペアと練習することで表現の幅が広がり、英語が使えるという喜びから自己肯定感の高まりと学習意欲の向上に繋がったことをご指摘いただいた。加えて、言語活動を通して言語材料の指導を充実させるために、授業を英語で行うことを基本とし、ICTを効果的に活用すること、ALTを授業に参画させること、さらには思考・判断を通して情報を整理し、自分の考えを形成、再構築できるような指導の大切さについてご助言をいただいた。

３　授業力向上アドバイザーによる講演

「コミュニケーション能力育成のために」と題して、文教大学国際学部教授の阿野幸一先生から、研究授業の内容を詳細に解説していただいた。特に、繰り返し続ける言語活動は練習であり成功へのプロセスであること、そして正しい英語表現は教科書で担保し、少々の誤りを恐れて表現しようとする気持ちが削がれてはいけないこと等を教えていただいた。生徒の英語力向上のために自分の指導法を見直すことの重要性を再確認できた。

村田　　真（下・入善中）

富　山　地　区　　（富・西部中）

１　研究授業

２学年では、山田寛人教諭とALTケビン・シュライバー先生が、「外国に滞在するときに必要な情報についてやり取りしよう」という学習課題を設定し、スライドを用いて、外国の生活習慣やマナーについてペアでの対話活動を行った。JTEとALTによるデモンストレーションや、生徒とALTによるやり取りで示したリアクションや質問がよいモデルとなった。また、相手を替えて繰り返し対話したことで、次第に相手意識をもってやり取りできるようになったと思われる。

３学年では、野村奈々花教諭が、災害時に困っている外国の人に適切な情報を伝えることを目標とする授業を提案した。生徒は、状況に応じて伝えるべきことや聞きたいことを考えながら対話した。地震によって発生した交通障害という場面を設定したことで、生徒は当事者意識をもち、意欲的に学習に取り組んでいた。

２　研究協議（指導助言）

２学年の部会協議では、即興でやり取りをする手立てについて協議した。原稿に頼りすぎないようにウェビングで考えを整理したり、単語のみをメモしたりするなどの工夫が紹介された。

３学年の部会協議では、即興で話す力を身に付けるための教科書を活用した活動の工夫や、日頃の取組等について情報交換した。

水上美淑指導主事（西部教育事務所）からは、言語活動の目的・場面・状況が適切で、生徒に身に付けさせたい力が明確であったことや、活動途中に表現方法の確認をしたことが生徒の自己調整につながったと評価いただいた。また、他者との意見共有のためのICTの活用や、振り返りの視点等、授業改善のポイントについてご助言いただいた。

團千加子主任指導主事（東部教育事務所）からは、学習者主体の問題解決型の授業をする上で、見通しをもった活動にすることや、目的・場面・状況を設定し、生徒がもっている情報を駆使できるようにすること、繰り返し対話練習する機会を設定すること、生徒同士が評価し合える環境を醸成すること等についてご助言いただいた。授業を構想する際の視点としていきたい。

志賀　靖子（富・和合中）

【研究主題】　コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
－聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して－

高　岡　地　区　　（氷・西條中）

１　研究授業

吉國京子教諭が、ALTマシュー・メレロ先生と１学年で研究授業を行った。吉國教諭は日頃から４人グループでの学習形態で授業を展開し、生徒が自由に交流できる雰囲気や環境をつくっている。

本時では、「自分が学校に行く理由をジャクソンに伝えよう」の課題のもと、学校へ行く理由を即興で会話する場面でグループ活動が取り入れられた。メンバーを替えながら、２分間のグループ活動を３回行った。その都度、活動を振り返り、言い方が分からなかった表現やALTからの助言等を共有していた。初めは２～３文で伝え合っている生徒が多かったが、最終的には４文以上で伝え合うことができるようになった。また、振り返りの際、会話がより深まるための８つのポイントを教師がホワイトボードに掲示し可視化することで、生徒は対話の継続・発展を目指してポイントを意識しながら、言語活動に取り組んでいた。

２　研究協議（指導助言）

部会協議では、授業のよかった点として、①コミュニケーションに制限を設けないこと②よい雰囲気が形成されていたことで、生徒同士、生徒対教師のやり取りが英語で活発に行われていたこと③活動ごとに目標を設定することで、生徒のモチベーションが持続していたことが挙げられた。

宮城渉主任指導主事（西部教育事務所）からは、本時の目標に向かって生徒が意欲的に取り組めるようにするためには、①言語活動に十分な時間を充てること②活動の振り返りを小まめに行うこと③ペアやグループで教え合うことができる集団を日々の授業で形成すること④生徒が学習の見通しをもてること等が効果的であるとの指導助言をいただいた。

山崎　拓郎（氷・西條中）

砺　波　地　区　　（小・蟹谷中）

１　研究授業

金智子教諭とALTのユキ・ガマダ先生が、２学年で、学習課題を「ユキ先生が気になっている日本のものについて紹介しよう」として授業を行った。帯活動、JTEとALTによるオーラルイントロダクション､学習課題の設定に関連性があり、生徒たちが新出の文法事項を自然に理解することができる授業展開となっていた。また、イマーシブリーダー機能の効果的な活用や視覚教材の提示の仕方等により、どの生徒も課題に取り組みやすいよう工夫がなされていた。

２　部会協議（指導助言）

小グループに分かれ、①「英語に触れ、コミュニケーションを図るための学習活動の工夫について」②「一人一台端末等ICT活用の手立てについて」の２つの視点で協議を行った。「生徒同士のインタラクションを通して生徒自身がよりよい表現の仕方に気付くことのできる学習活動の工夫が参考になった」「様々なICTの活用アイディアについて今後参考にしたい」等の意見が挙げられた。その上で、各自が実践している学習活動やICT活用の工夫等について情報共有が行われた。

中谷吉孝指導主事(西部教育事務所)からは､「言語活動の目的、場面、状況に合わせた学習課題が設定されていた」「中間発表で生徒のよい表現を紹介したことで、他の生徒が参考にして取り入れていた」「振り返りは教師のねらいとする視点について行うことが大切である」と助言をいただいた。

３　授業力向上アドバイザーによる講演

文教大学国際学部教授の阿野幸一先生による講義を聴講した。文法学習の３つの視点（Form, Use, Meaning）の関係性や、文法指導において、言いたいことがあり、それを言語化する力を付けることが大切であること、生徒のやる気を高める指導に必要なこと等、英語指導における視点について、具体的な事例を交えながら分かりやすく教えていただいた。今後の授業改善に向けて多くの助言をいただき、大変有意義な研修会となった。

樋掛　　香（砺・庄川中）

各地区の取組から

下新川郡中教研

下新川郡中教研英語部会では、研究主題に基づいて、日々の授業における研究実践、授業改善と指導方法の工夫に取り組んでいる。

６月部会では、例年実施されていた会員による研究授業は行わず、池原教諭とALTナディア・ズベィール先生の研究授業について話し合った。その話合いを通して、同じ教科書を使用して教える会員にとって、要点として押さえる内容が同じでも、導入や教える方法が多様であるという新たな視点を得ることができた。日頃の授業改善と指導方法の工夫に繋がる有益な部会協議となった。

10月には、東部地区研究大会で池原教諭による研究授業が行われた。特筆すべきは、「話すこと」の「やり取り」と「発表」を授業に取り入れ、即興によるインタラクションを行ったりICTでスピーチを録画し合ったりするなど、日頃の授業実践で４技能をバランスよく指導している点である。加えて授業者と生徒の双方の英語使用量が多く、各会員の授業改善に役立つ要素がちりばめられた授業であった。帯学習のスモールトークと、学習課題である「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」のスピーチが関連付けられており、来日間もないナディア先生に職業体験についてスピーチ発表するという課題は、生徒にとって大きな動機付けとなった。生徒の授業に取り組む意欲を喚起する学習課題の設定、生徒同士または教師と生徒のインタラクションを継続して行うなど、会員の授業実践に役立つ研究大会であった。

次年度以降も、各会員の授業改善と指導方法の工夫に資する研修会となるよう、日々の授業実践で研究を継続していきたい。

村田　　真（下・入善中）

魚津市中教研

魚津市中教研英語部会では、研究主題に基づき、年間を通してコミュニケーション能力の向上を目指し、授業改善と指導方法の工夫に努めている。今年度、実践された例を紹介する。

教科書の対話文の音読をコミュニケーション活動の第一歩として生徒が捉えるように、生徒に聞き手意識をもたせるため、会話が行われている場面や状況を考えながら、相手の目を見て話したり、役になりきって音読したりするよう助言した。さらに、その会話文の話題に関係する自分自身のことも表現するよう指導した。また、会話を深められるように、生徒が使える相づちや質問の表現等を多く扱うように努めた。即興でのやり取りができるように、ICTを活用し、電子黒板に投影された質問を見て即座に自分の答えを言う練習や、提示された英語が答えとなるような質問を言う練習を取り入れた。答え方についても、1つの質問に対し、1文で答えるのではなく、さらにつながりのある英文を付け足して話すよう指導した。今後も、生徒たちが会話において聞き手意識を大切にし、会話を深められるよう、指導を工夫していきたい。

10月には、「ALTの家族に日本文化を紹介しよう」という課題のもと、生徒は、カナダに住むALTの家族とビデオ通話を利用し、伝えたい日本文化を紹介した。場面状況の設定を明確にし、実際に海外の人とコミュニケーションを行う機会を設定することで、生徒が課題に取り組む意欲を高めることができた。また、相手が初めて知る日本文化について分かりやすく伝えるにはどうしたらよいか考えさせ、聞き手意識をもたせることもできた。

今後は、他郡市の取組を参考に、音読練習や、英作文を書く活動での一人一台端末の効果的な活用等についても検討していきたい。

上野　実里（魚・東部中）

中新川郡中教研

中新川郡中教研英語部会では、研究主題に基づき、各校で研究実践を重ねたり、定例部会での情報共有を行ったりしている。今年度は、「指導方法の工夫」として、基礎・基本の確実な定着を目指した効果的な帯学習の実践事例について情報交換を行った。また、主体的・協働的な学びを目指した授業研究を行い、研究を進めた。

５月部会では、各部員が実践している帯学習を紹介し合った。一人一台端末によるKahoot！という英語学習アプリケーションを活用した振り返りの活動に、生徒が意欲的に取り組んでいる例等が紹介された。また、音読練習やQ&A活動を定期的に行う事例等、生徒の実態に応じて各部員が行っている基礎・基本の確実な定着を図るための取組について、情報交換することができた。

９月部会では、１学年の授業研究を行った。授業では、課題に向け、導入からICTを活用し、定着させたい言語表現の復習を行った後、ペアでスモールトークやクイズづくりを行った。協議会では、スモールステップで活動を行うことで、生徒が意欲を持続させながら安心して活動に取り組むことができ、効果的であったとの意見が聞かれた。

次年度は、本研究で学んだ帯学習の実践や、ICT、学習者用デジタル教科書の活用等、生徒が主体的に学ぶための手立てや工夫について、さらに研究を続けていきたい。

作田　恵美（中・舟橋中）